

## 第101回日本精神神経学会総会

## 精神医療奨励賞受賞講演

## 沖縄県立八重山病院精神科 (通称: ころ科) 紹介

葛山 秀 則 (沖縄県立八重山病院精神科・現: 兵庫県立光風病院)

## 受賞内容

沖縄県立八重山病院精神科 (通称: ころ科) は、30年にわたり、石垣島をはじめ点在する与那国島・西表島・竹富島など八重山群島の精神医療をにない、巡回診療・訪問看護などを積極的に行ってこられました。その献身的な努力により地域の精神医療の推進に寄与されたことは、我が国の精神医療の発展に貢献するところ大でありますので、その功績を讃え表彰します。

## 講演内容

賞をいただいてありがとうございます。実は、私が八重山病院にいたのは去年の7月までで、今は兵庫県にいます。8年11ヵ月、八重山病院にいました。その時のことをもとに紹介させていただきます。八重山の位置ですが、中心は石垣島にあります。台湾と同じぐらいの緯度でありまして、沖縄本島から飛行機で約1時間かかります。距離感をわかりやすくするため、仮に石垣島が大阪にあるとしますと、宮古島が名古屋あたり、那覇が群馬県あたりになります。石垣から船で約40分のところに西表島があるんですけど、ここに巡回診療した時のスライドです。巡回で定期的に回っているところは与那国、波照間、西表、小浜、の4島です。病棟ができたのが、1973年。それから、1年後には巡回診療が開始されて、現在まで30年間こういう離島巡回診療をしています。基本的には自宅訪問をして診察するという方法をとっていますが、島によっては、診療所とか保健師のいる相談所に来てもらう診察も組み合わせています。

訪問中、見える景色はどこもきれいです。裕福と言えないところもありますが、自然にはすごく恵まれており、そのなかでの生活があります。西表島では、車を利用して離れた家々をまわりますが、おおきくは東部と西部にわかれています。その間車で約1時間かかります。東部、西部にそれぞれ保健師さんが住まわれています。それから診療所も東部と西部の2ヵ所あります。巡回診療の日は朝、東部から船で入って東部巡回した後、西部に向かいます。その時、東部と西部の保健師が連絡を取り、お互いに中間地点に向け車を走らせます。一本道だからできるのですが、途中出会った場所で引き継ぎをして車を乗り換えます。この距離はきついというのが実感です。

巡回スタッフは、病院の精神科医師、看護師が病院から出向き、現地の保健師と合流し3名が基本となります。そこに福祉の担当者が日を合わせて一緒に現地に出て、必要なところは一緒に回ったりします。それから生活支援センターも日を合わせられれば、一緒に回っています。各診療所へは、巡回時必ず立ち寄り、その医師、看護師と情報交換します。精神的な問題を抱えたケースへの対応を相談したり、実際に診察することもあります。八重山病院は、大学医学部の実習を受け入れており、学生にも巡回に同行してもらっています。こういうところを回って学生は、きれいなところでのんびりしているんだろうな、という楽園的なイメージだったのが、実際、病をかかえながら生活していく苦しさとか、貧困の問題に直面し、想像と現実の落差にあせんとする人も多くいます。

1日目の巡回も終わりが近づく夕方になると、考え込んでしまう学生もいます。

石垣に話を戻します。八重山病院の病棟は、築25年で老朽化しています。そのなかで、八重山諸島唯一の総合病院として、24時間救急体制を維持しています。精神科もその体制のなかで、精神科希望あるいは精神科対応が必要と思われる患者が来院した場合、精神科医がファーストコールされます。当然、他科の医者がファーストで診察し精神科依頼となることもあります。夜間、警察経由で来院するケースでは、救急外来の診察室では対応困難となり、精神科外来の診察室や待合室を使います。診察、状況把握、緊急入院の手続き等でごったがえすこととなります。精神科病棟と精神科外来は同じ建物にあり、病棟看護師と一緒に対処もでき、病棟への誘導もスムーズにできます。精神科病棟は50床、隔離室2室で、基本は全開放の病棟です。中庭への出入り口も普段は開いています。外出制限が必要なケースが出ると、こういう出入り口を全部施錠し、詰所を通して出入りするという形をとります。年に一度、病棟内で病棟やデイケアで作った野菜や手工芸品を展示即売する作品展を開いています。地域の作業所、生活支援センター、保健福祉センターや離島のデイケア、外来患者も作品、パネルを持ち寄ります。関係者はもとより、一般市民、他科の外来患者、家族など様々な来場者でにぎわいます。野菜は特に人気で、飛ぶように売れていきます。売りながら、中庭の奥の畑で収穫もしていきます。入院患者とスタッフが、夢中で収穫した野菜を洗って束ねる作業をし、それを見て出来上りを待つ来場者、みないい笑顔しています。中庭の奥では山羊を飼っています。かなり前から山羊を飼っていて、山羊の餌を取りに行くために、患者とスタッフはワゴン車で毎日草刈りに出かけます。最近、病院周辺に草が減ってきたため、やや遠出しなければなりません。こういうふうに山羊を飼ったり、畑を作ったりということが自然とされています。最近では少なくなってきましたが、どの家にも山羊がいて畑があって、それが日常の生活であり、病院

に来て、同じようにできるということが結構大事なことなんです。家から突然離れても、生活のリズムや習慣が急に変わらないという面でも意味があることだと思っています。

那覇まで行くのにも飛行機で1時間ぐらいかかるこの地域で精神科医は当病院の4人だけです。この地域で起こる精神科医を必要とするすべての問題にまず、この4人で対応する必要があります。先ほど話した精神科救急はもちろんのこと、子供の問題、虐待の問題、老人の問題、アルコールの問題、司法的な問題等すべてに関わります。こういう中では当然、医者、看護だけでは解決できない問題が出てきます。いろんな職種の方々とやっていくということが自然と必要となってくるし、それによってなんとかやっていけるという環境であるということです。これは、僕にとって、とても良い経験をさせてもらったと感謝しています。

八重山病院精神科ができてから、ずっと収容主義に陥らずやってきました。地域で限界まで診ていくという風土が引き継がれてきました。開設当時から、極めて先進的なことを考え実行してこられたスタッフがいたこと、これはすごいことだと感じています。それから、地域の受容力の問題ですが、精神状態の悪い人に対しそれほど排除しようという発想が生まれてこないのです。当然、程度の問題や持続、繰り返しの様子で違ってきますが、その人自身のことを周囲の人達がよく知っているということが大きく関係していると思います。すなわちその人がいきいきとしていた時のことや、活躍していた時のこと、家族の状況などをよく知っている人や、いい関わりを持っていた人がいたりします。そのような関係性の中から、今は状態が悪いけど早く元気になってほしい、という気持ちが出てくるのだと思います。

もう一つ話しておきたいのは、病院スタッフのことです。開設当初から一貫して、精神科医療を自分達の問題として考える視点を持ち続けているということです。自分が患者ならこう思うだろうという発想、共に暮らす住民の一人、いっしょに年を重ねていく隣人としてこの人に何ができるの

だろうという発想です。本日、八重山病院スタッフが3名石垣から来ていますので、紹介させていただきます。河野将英医師、仲里栄光看護師、田幸香代看護部長の3名です。現地八重山では、ちょうど今、与那国島巡回診療をしています。離島巡回診療も途中いろいろな困難がありました。なぜ病院から行く必要があるのかと言われることもあったと聞きます。私宅監置から何とか出せた患者が石垣島まで来ることができず薬も途切れ、再燃、私宅監置にもどるということを繰り返してしまう状況を変えようと、始まった巡回診療です。実際、石垣島まで診察を受けるには、一泊する必要があったりして費用面でも厳しいため受診したくてもできない人が多くいます。なぜ行くのか、との問いに対し毅然と、必要としている人がいる、必要な事はする、と主張し活動を続けたスタッフがいたのです。そのおかげで、現在も巡回診療が継続されています。今回、八重山病院精神科の活動を評価していただいたのも、様々な困難を乗り越え、きちんとした視点を持ち続けたスタッフの努力が評価されたものと思います。ご静聴ありがとうございました。

(スライドを使った発表であり、一部話した内容を変更しています。)

#### 発表当日配布資料

##### 「沖縄県立八重山病院の紹介」

沖縄県立八重山病院は、沖縄本島より南西約430 kmに位置する石垣市にある日本最南端の総合病院である。当院の診療圏は主に、1市2町、有人11、無人10余の島々からなる八重山諸島(人口5万弱)で、地域の基幹医療機関として救急も24時間対応している。当院精神科は50病床を有する地域で唯一の精神科医療機関であり、他科と同様常時対応できる体制をとり、地域の要請に応えている。八重山の現代精神医療の歴史は巡回診療の歴史でもある。沖縄県においては1900年(明治33年)の精神病患者監護法は1960年の沖縄精神衛生法制定まで残された。八重山地区では精神病患者の監置の取り扱いを1952年まで

は警察が、それ以後は保健所が行なった。1964年に精神科医が初めて八重山に派遣され、その2年後に精神障害者実態調査が行なわれ、1967年宮古島に精神科病棟が開設されたのを機に、宮古より八重山への巡回診療が始まった。当初3週間に1度、八重山保健所で外来診察が行なわれ、1969年より八重山病院で精神科外来が開設された。しかし、常勤の精神科医はおらず、3~6ヵ月交代の本土派遣医で維持され、精神科職員は保健所精神衛生係という状況であった。1972(昭和47)年、沖縄の日本復帰があり、その翌年の1973(昭和48)年に、八重山病院精神科病棟が開設された。病棟開設までの6年間、石垣島を含む八重山諸島全体の巡回が行われ、精神障害者の私宅監置、放置などの状況が明らかになり、治療に導入する努力が続けられた。当時のレポートでは「この6年間に、いわば限界まで、在宅のままでの治療ということが追及された」と記されており、この時の活動がその後の八重山の精神医療を方向づけた。収容主義に陥ることなく、当事者の住む場で治療していくとの考えから、当然のこととして、活発な訪問活動、離島巡回診療が実践され、現在に引き継がれている。

病院のある石垣島内については訪問看護を定期的に週1回及び随時行なって在宅患者へ積極的なケアを行なっている。波照間島、小浜島、西表島、与那国島については、2ヵ月に1度、竹富島、黒島、鳩間島は不定期に、医師、看護師、保健師で巡回診療している。生活支援センターのスタッフや、福祉のケースワーカー、離島診療所の医師、看護師が加わることもある。定期巡回以外に、離島では担当保健師の訪問、相談活動が行なわれ、島によってはデイケア活動も行っている。病院には離島からも多くの電話相談があり、離島巡回で顔見知りとなっているスタッフとは、生活の見える会話を可能にしている。病院スタッフ間では、巡回での状況について話し合う機会を定期的に持ち、情報を共有する努力をしている。

症状悪化したケースが出た場合、病院スタッフと離島保健師が連絡を取り合い対応を話し合う。

興奮状態が激しくなると、離島診療所の医師も交えて鎮静方法を話し合ったり、警察官に保護してもらう場合もある。しかし、保健師の連日の服薬指導で落ち着きを取り戻したケースや、保健師の説得で病院受診するケースも多い。保健師からの情報は、当事者の置かれた家庭状況、周囲の人々との関係など、病状と密接な関係のある事柄や、現場でしか分からない空気（雰囲気）も伝えてくれるため、病院スタッフも当事者の立場に立ったアドバイス、対応を可能にしている。巡回診療において各職種が共に関わることで、当事者を含めお互いの信頼感を高めていると感じている。

#### 発表を終えて

八重山の精神医療を初めて知ったのは、神戸大学精神科入局して数ヶ月した頃だった。当時教授の中井久夫先生は、若い医者に対し「さみだれレ

クチャー」という精神科臨床に関する多彩な話をして下さっていた。ある日、八重山の話になった。地域に根ざした開放的な医療、ダイナミックなスタッフの動き等々その話は魅力的で、その場にいた同期入局者の多くが「いつかそこで働く」との思いを抱いた。その後、実際に次々と八重山を経験していった。私も幸運なことに、「さみだれレクチャー」の10年後、八重山のスタッフになった。そこで教えられたことはあまりに多い。八重山で出会った人すべてに感謝したい。また、八重山病院精神科開設以降、八重山で勤務された多数の精神科医が全国各地で今も活躍されている。その方々のおかげで今の八重山があることを強調したい。今回、八重山の精神科医療を紹介する機会を与えていただいた日本精神神経学会関係各位に感謝するとともに、これまでに八重山の精神科医療に関わり支えてこられた方々に敬意を表したい。